# 部屋からスペースへ／
# ハマースホイの室内画に見るインテリアの近代

灰山彰好

From Room to Space / Modern Interior expressed on the Pictures of VILHELM HAMMERSHOI
HAIYAMA, Akiyoshi

## はじめに

近代／現代住宅の課題は－と改まって問えば万言を必要とする難問になるが、私の経験から敢えて要約すると、「部屋からスペースへ」ではなかったかと思う。実体よりも関係の創出に優位を置く設計思想である。

この報告は、一昨年度東海大会「部屋からスペースへ／シュレーダー邸を題材とするインテリアの近代にかかる思考実験」の続報である。前報では個々の部屋レベルでは特に工夫のないシュレーダー邸が、引き戸の開け閉て具合によってスペースとして活き返る設計者の意図（後に構成主義と呼ばれた）を、CAD を用いて検証した。この報告では、20C の初頭に活躍したデンマークの画家ヴィルヘルム・ハマースホイが室内画で試みた“実験”（同展カタログによる）を CAD によって再現し、表記仮説「部屋からスペースへ」の妥当性を検証する。

## 研究の動機と方法

生活科学部の中で住宅を主に建築教育をしていた前職の折、「住宅の内観パースが描けない」と訴えてきた学生がいた。見ると部屋の片隅のベッドを絵にしようと四苦八苦している。君は一体何が描きたいの、絵心がないね、旅に出なさいと揶揄したが、期限もあることゆえ、隣室境界の扉を背景に、扉を開けて隣室の様子を遠景にした遠近感のある絵を描くようアドバイスをした。そこで反省、私こそ何を描かそうとしていたのか・・・以上が前報で述べた研究の動機であるが、昨年秋、上野の国立西洋美術館「ヴィルヘルム・ハマースホイ展」において、レベルこそ違え動機としてはまったく同様の試みに挑戦した名画を観た。

同展カタログによればフェルメールが活躍したオランダ・デルフト派の影響が濃いとある。同派には建築空間の描写に透視図法を用い、視点設定にこだわりをみせる（フェルメールの「絵画芸術」）など、対象を相対化する意図がうかがえ、建築画を描く立場から見て親近感を覚えるが、ハマースホイの画業ではさらに焦点と守備範囲（何をどう描くか）を絞った興味ある実験が試みられている。国宝級の名画に対して僭越と思いつつも興味は抑えがたく、表記テーマの題材に取り上げてみた。

同展カタログに掲載された画家の自邸プラン（コペンハーゲンストランゲーゼ通り 30 番地のマンション fig.5）を CAD に入力し、三次元画像の出力を通して画家の意図（絵心）を探ってゆくものとする。

## 実験と考察

部屋数重視の小邸ゆえ絵心をくすぐる吹き抜けもコリダーもないが、同展カタログをによればハマースホイはこの住まいで 29 枚もの室内画（肖像画を除く）を描いている。最も力が込められているのは、食堂①からホール③を経て玄関出口を見通した photo1 の構図であり、同じ透視図下絵を使ったと思われる室内画が 5 枚存在する。プランから作成したラフな透視図を fig.1 に、photo1 に似せて加筆した「絵」を fig.2 に示す。部屋が狭くて引きが取れない、透視図法ならではの作画であって、プランデータから名画の構図が再現できたことに興奮を覚える。内と外の関係を描こうとする主題が近代的と評した理由であり、人物は－描かれているケースにおいても－点景の役割を果たしているに過ぎない。

photo2 は食堂①から居間④を見通している。点景としてイーゼルを立て、フェルメール「絵画芸術」を思わせる構図であるが無人であり、益々今日の建築家パースに似てくる。ハマースホイが本当に描きたかったのは、fig.3 のようなスペースではなかっただろうか。

photo3、fig4 は、唯一日射が得られる⑥室を描いた 7 連作の内の一つである。北緯 56 度、西に 35 度振れた同室の夏至期日影図をプラン上に記す。日射を題材として執拗に描いたことに、新奇を追う画家の意図（例えば自然を描く）がうかがえる。

## 結び

室内パースを使ってスペースをデザインする（教育現場ではさせる）研究スタンスがあり得るようである。さらに題材を探して試みてみたい。

（一級建築士事務所 studio HAIYAMA 主宰）

photo 1

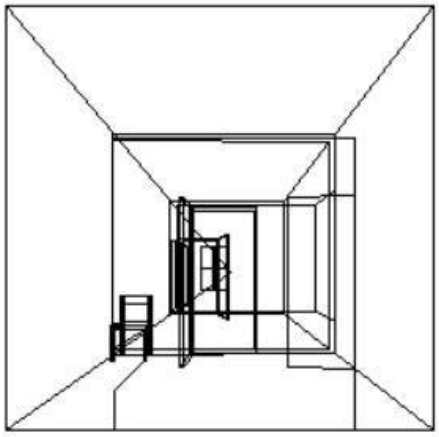

fig.1

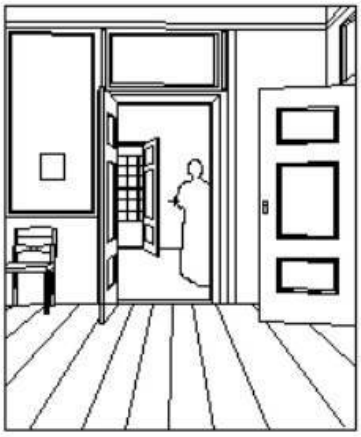

fig.2

photo 2

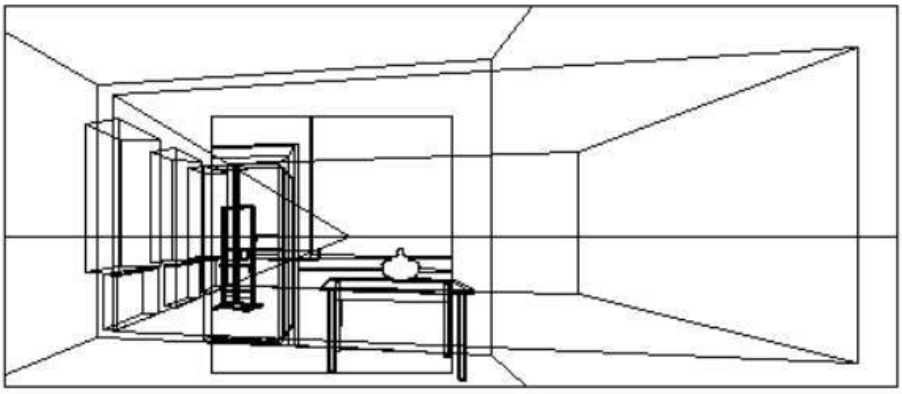

fig.3

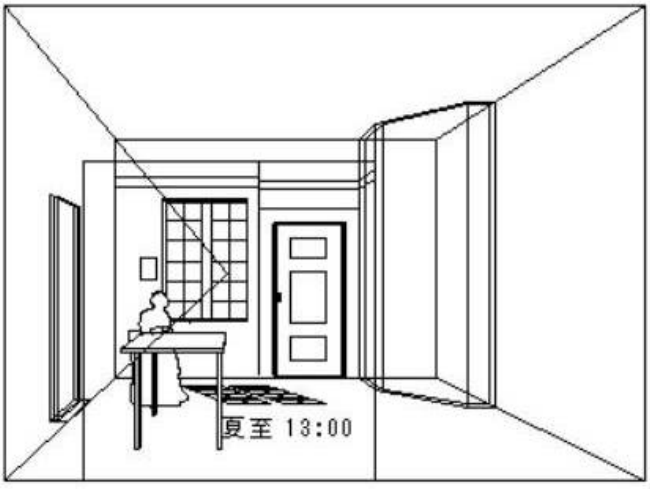


fig.4

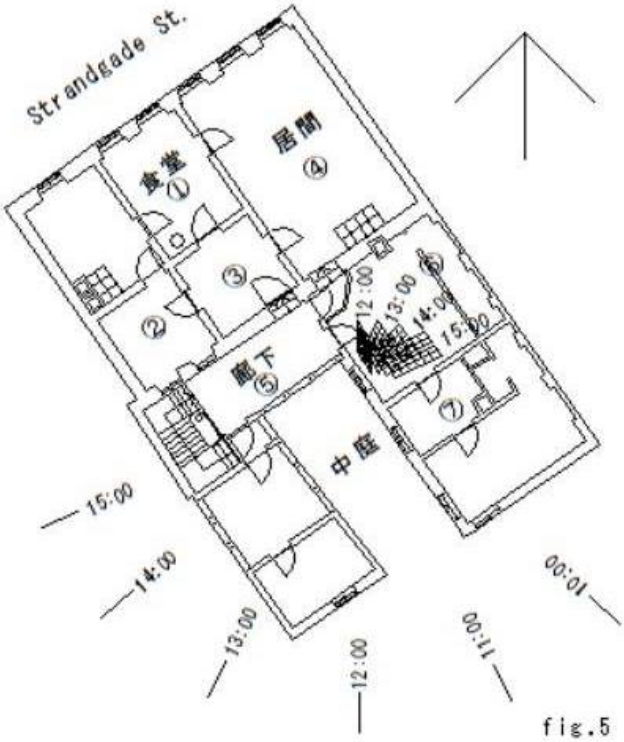


fig.5

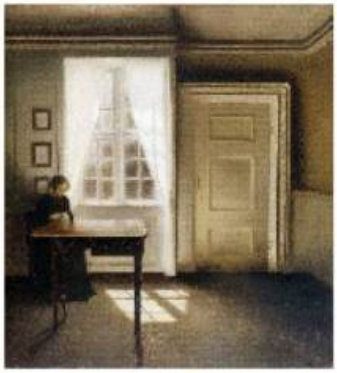

photo 3